

〔西宮記臨時四〕菅笠。

公卿及祭使、御禊前、駢持之。白鳳制云、三品已上聽菅笠之云云。

〔内宮長曆送官符〕御裝束 伍拾肆種 大神宮御料略○中

菅。大笠。貳枚 柄長各八尺五寸、徑一寸二分、里漆平文、金銅桶尻、長一寸六分、耳金二隻、副緋綱四條、

長各二丈骨貳拾枚、漆塗骨末押、金薄、其體如蕨形、廻曲各伍枚、竹削漆塗、頂覆金銅盤形、金壹枚、徑七

寸、笠口徑肆尺陸寸貳分、已上納緋袋壹口。裏生、純、肆幅。

〔日本書紀二十六〕七年八月甲子朔、是夕於朝倉山上、有鬼著大笠、臨視喪儀、衆皆嗟恠、

〔儀式一〕春日祭儀

祓日時刻、齋女駕車向祓所、其儀也。略○中 走孺近車左右各二人著紫、齋濃、執屏。織左右各一人次之。相當、孺○中

略 是間齋女駕輦參社、其行列也。略○中 執屏織左右各一人次之。相當、丁、執翳各一人次之。執笠各一人次

之。以上并著、退紅染衣。

〔延喜式十七〕賀茂初齋院并野宮裝束略○中

腰輿一具、屏織二枚。略○下

〔伊勢物語朱雀院塗〕富士の山を見れば、略○中 この山は上はひろく、まもはせばくて、大笠のやうに

なん有ける、

〔西宮記臨時五〕太上皇御行

延木十八年二月二十六日、參入於六條院云々。略○中 自酉刻陰雨。略○中 王卿等戴大笠、

〔枕草子九〕うへより御文もてきて、返事只今とおほせられたり、何事にかと思ひて見れば、大がさ

のかたをかきて人はみえず、只手のかぎり笠をとらへさせて、下に、

みかさ山やまのはあけしあしたよりと、か、せ給へり。略○下